BULE Jewel

Infinite Stratos

ゴク…

ん…ああ…

そ…ソコイイですわ

BLEU
Jewel

ドキドキ
年不相応な下着だな そのうえ黒か
おーマセガキめ
チ
はっ
ぶるっ
先生！もう離してください
一夏さんに見られでもしたら…
もじもじ
きゃあああ
ニヤ
ハッ!?
ゴク
ぎ
ゲッ
ゲッ
ぐわっ

はあ
はあ
はあ
な…
ぐっ
何なのですのこんな時に…
何ってマッサージの続きを…
いきなり浴衣を捲り上げるなどありえませんわ！
ゴク…
皆さんも見ていますのよ！
てー
やあ…悪かった
いつもは…指圧の後はオイルマッサージになるんだよ
昼の浜辺の続きって事でな？セシリア…
脱いでくれないか？

何をおっしゃっていますの!?

んな！

えっと…

ーなら終わりにするか？皆も順番待ってるし…

浴衣の上からじゃ無理だろ？

ー!?

あ…いえその…まだ

突然の事で心の準備が…

ドキ

ドキ

あまり…見ないでくださいましね…

では一夏さん…

ドキドキ

オネガイいたしますわ…

スルッ

…おう

ゴク…

ドキドキ

じゃ…じゃあ始めるぞ

スルッ

…ハイ

ぴっ

!!

にゅるっ♡

にゅるっ♡

はぁ…♡

ぷにっ

ああ…♥

にゅるっ

あぁ…ん
一夏さん…

とっても気持ち
いいですわ♥

一丁前に
発情した雌声を
出しやがって

だがこのままだと
せっかくの勝負
下着がオイルで
汚れてしまうな

よし、これで
いいだろw

きゃあああッ!!

先生ッ!!何するんですか!?

…セシリア…

こうしたほうがもっとやる気がでるだろう？ギャラリーも楽しめる

なぁ一夏？

うぅ…

ゴク…

そのまま続けるから…

ーッ!?

は…ハイ

…ハイ…

これでは一夏さんに…丸見えですわ…

ちゃくぅ

はあ

はあ

ちゃるん

ちゃる

あぁ…オルコット家当主のこの私が衆前でこんな格好を…

あ…はぁ♡

にっちゃ

キュ

にちゃ

くちゃ

セシリアの肌…とても綺麗だ…

はー

はー

はー

んあ♡

ヒクッ

みにゃ♡

セシリア腰を上げてくれ

くちゃ

はー

はー

ハイ…

あんッ♡
はあ
あッそんなに広げられてしまったら…私…
やん♡
はあ
あ♡
ぷにゅん
ぎゅう
ぱにゅ
にゅぷ
あ♡

ぺろ
あぁ♡
ぺろ
ぺろ
あぁ♡
一夏さんがそんな…
皆さんが見ていますのにッ!!
ぬぁん♡
ぬぁん♡
ぬぁん♡
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
じゅわ♡
じゅわ
じゅわ
じゅわ
んぐっ

ゴク…
セシリア…仰向けになってくれ
…ハイ…
どうして…？一夏さんに逆らえない…
はあ
はあ
はあ
はあ♡

あんっ♡
はー
はー
はー
はー
ぴくっ
あっ♡
はあ♡
一夏さんの熱い舌が私の…
今ソコを吸われたら私…ッ
びくっ
ちゅぱ
ちゅぱ
ちゅぱ
ちゅぱ
ちゅぱ
じゅわ
あっ♡
ちゅぱ
じゅぱぱっ
ぷるぷる
はあ♡
はあ♡

あっ♡
ぐにゅん
私の前で
実姉
こんなに
硬くして…
マセガキの股は
そんなにも
美味かったか？

私の汚れ物でマスかいていた頃に比べれば少しは成長したか？

その話は言わないでくれよッ！

ーッ!!千冬姉ぇ

ザワ

ザワ

ザワ

ゴク…

ちょっと
お待ちになって！

ま…まだ
わたくしの順番は
終わってませんわ！

ぜク

ぜク

一夏さんの最初の
お相手はわたくし
ですわ！

わたくしは
オルコット家党首…

ち…ち○こを舐める
くらい造作も無い
事ですわ…

ドーン

ん～

ちろ

あぁ…コレが
一夏さんの…

うわっ

一夏ーッこれでもかぶってなさいよ！

はー

はー

ふん！よく似合ってるじゃない！

千冬さんの下着で興奮してたなんて

はあ

はあ

アンタってば相当なヘンタイね！

今夜はずっとソレかぶってなさいよ！

ぴくっ

ホラそこの二人…真似して脱ぎ始めてんじゃないわよ

ぴーん

ゴク…

んっ

あん♡

あはー♡

ちらっ

一夏のヤツ…小さいころはあんなに可愛かったのに…

竹刀の柄より…ふ…太いではないか…

一夏がこんなに逞しく…

ちょ…ちょっと箒さん!?

織斑、貴様はどんな大きさの胸が好みだ?

一夏は普通がいいよね?ね?

あ?えっと…その…

まぁ答えずとも今夜ココには各種サイズが揃って居るしな…

鳳、貴様の貧相な胸も出せ

くらりっさが

ああ、もうっ狭苦しいなぁ!

貧しかないわよ!!

一夏…さん

私たちはもういつでもOKですわ…

ならさっきの続き最初はセシリアな

あ…その一夏…さん

わたくし初めてですので優しくお願いしますわ…

わたくし初めてですのに…？

すごく…気持ちいいッ

はぁぁぁ〜

あぁ♡一夏ーッ!!
一夏さんッ♡
次は…私の番よ!
アンタは無駄にデカイんだからやさしくしなさいよね…

織斑一夏、今日は特別に多妻を許可する
今夜は思う存分貫くがイイ
ちょっと！ラウラ!!
一夏にッ!? こんな格好恥ずかしいよ！
うぁ…鈴の膣(ナカ)すげぇ狭い…
うぁあッ一夏ッそんな激しいよぅ!!
あぁん♡ あああーッ!!
はぁあああんッあああーッ!!
やっいヤダダメッいっちゃ…う…ッ!!
ん…ちゅチュワッ

あぁん♡そんな小刻みに入り口を擦り上げられたらッ

私がッ私のほうが嫁になってしまうッ!!

あ…熱い♡

アアァっ!!イクぅー!!一夏ーッ!!!

お腹いっぱいでこれ以上もう入りませんわ～

セシリアのやつすっかり寝入っちゃったな

浴衣でも引っぺがせば起きるわよ

ビク

ハッ

し…失礼しましたわ

!!

ガバッ

ぷよん

じゃん

気持ちよかったんだろ？イイってx2

はう!!

しみっ

おほほほー

ん？どうかしたか？

いえ何でもありませんわ

ぷっ

さぁ次はだれからだ？遠慮すんなよ

ガバッ

むー

コホン

ポカ…

まぁあれは…
濡れちゃうわ

ほら遠慮
するなって

今夜はその布団で
一夏が寝るんだ

後がつかえて
いるんだお前たち
早くしろ

しっかりと
マーキングして
おくんだな！

ぼ…
ボクが…

わ…私だ

わたしよ！
ワタシ！

も…もう一度
わたくしに
ですわ！

私だ！

お…
おう

●BLUE Jewel END

18pの
回想後

ボディタッチに
ご用心
ミコト

ギラギラと強い日差しが照りつける、夏。
そんな季節に合宿する場所となったら、やはり連想するのは海だろう。
夏という季節だからこそ、海での合宿が成り立つようなもの。
砂浜でのお遊びのようなレクリエーションも、足腰の鍛錬には大いに役立つからだ。
ＩＳ学園の1年生も、そういった理由で今回海の近くの学園の施設である旅館での合宿と相成ったのである。

昼間、ファッションショーさながらの女子達の水着姿を堪能しつつ、遠泳やビーチバレーなどで躰を酷使させた一夏は、夕暮れになって漸く自分に与えられた部屋に戻る事が出来た。
海から戻ってすぐにシャワーで砂や汗を流し、それから部屋へと戻ってきたのだ。
今、旅館の厨房では旅館の料理長自らが腕を振るってくれての夕食の準備中の為、その間は一人部屋でのんびり出来るというところだった。

「それにしても…初日からハードだったなぁ…」
宿舎の目の前の海岸でした事と言えば、遊びのようなことばかりだった。
しかし、どれも全身の筋肉を使うような事ばかりだったのだ。
「遠泳はともかく、ビーチバレーが思いの外ハードだったもんなぁ…」
砂浜でのバレーボールは、簡単そうに見えて結構難しい。
ネットをはさんで2人対2人での試合なのだが、砂に足を取られるために思うように動けないのだ。
かなり脚力がしっかりしていないと、それこそボールの打ち合いなど出来ないだろう。
そんな試合を数回やれば、足腰にくるのも当たり前かもしれない。
「俺…もうちょっと鍛えないと…。こんなんじゃ、千冬姉にまだまだ敵わない…」
生徒達のビーチバレーの試合に途中参戦してきた教師組の動きを思い出し、一夏はため息と共にそう呟く。
元々の鍛え方からして、千冬の方が上なのだ。
そんな姉に追いつくのは至難の業とも言えよう。
しかし、それを実現させるのが一夏の目下の目標だ。
いつまでも姉に守られる立場に甘んじているつもりはない。

＊＊＊＊

夕食を食べて部屋に戻ろうとした一夏は、食堂の出入り口のところで呼び止められた。

「一夏さん、ちょっとよろしいかしら？」

そんな言葉で一夏を呼び止めたのは、セシリア・オルコットだ。

昼間、海岸でサンオイルを塗らされた事は記憶に新しい。

「なに？　セシリア」

振り向きざまに一夏がそう応えれば、セシリアはにこりと綺麗な笑みを浮かべた。

セシリアは貴族のお嬢様らしく、人を顎で使うのを当たり前だと思っている。

特に、男子はみな自分に傅けばいいと思っているような節さえある。

ただ、出逢った当初よりは一夏に対する態度も随分と軟化してきていた。

それでも、何かにつけて人にあれこれやらせようとする所は変わっていないのだけれど。

また何かやらされるのかな…。

だから、一夏がそう思ったところで、それは強ち間違いではないだろう。

それでも、根はとてもいい子なのだという事も理解っているだけに、そうされることに対する反発新は沸き起こらない。

逆に、自分に出来ることであればやってあげようと、そんな気持ちが生じるだけだ。

これは、一夏自身が常々『自分以外の者を守りたい』という気持ちを持っている為に、そこから起因しているものであろう。

それを一夏自身は特に意識しているわけではないが、同じ歳の女子であれば特に守ってあげたいという感情が揺り動かされるのだった。

一夏が足を止めてくれた事に気を良くしたらしいセシリアは、にこにこと笑みを振りまきながらするりと一夏の腕に自らの腕を絡ませる。

「この後、ちょっとわたくしの部屋に来て頂きたいの。よろしいかしら？」

ぐいぐいと腕を引っ張られるその動きと共に、一夏の腕にセシリアの胸が当たる。
柔らかなその感触に、思わず目が泳いでしまう一夏だ。
そんな一夏の様子など気にすることもなく、セシリアはすっと顔を近づけてきて囁いた。
「一夏さんにやって頂きたい事があるんですの。この後、何かしなくてはならない事、ありまして？」
余りに近い距離に顔を引きながら、一夏は頬を引き攣らせつつ口を開く。
「い、いや、別に…ないけど。今日は、後はもう寝るだけだし」
「そう。でしたら、ちょっとだけわたくしの部屋にいらして？」
「えっ？　セシリアの部屋？　それはちょっと…俺が行ったら拙いだろ？」
「大丈夫ですわ。ちゃんと人払いしてありますし」
「えっ？　それってどういう…」
「いいから、いらして」
セシリアの強引な誘いに戸惑う一夏だったが、強く拒絶することも出来ずにそのまま彼女の部屋まで連れて行かれてしまったのだった。

＊　＊　＊　＊

「…で？　俺にして貰いたい事って？」
セシリアに割り当てられている部屋まで連れてこられた一夏は、部屋の中に敷かれている布団から目を逸らすようにしながらそう彼女に訊ねた。
そうすれば、セシリアはごそごそと鞄の中から何かを取り出して。
「これを、塗って欲しいんですの」
手に持ったモノを一夏に差し向けながら、そう言ったのだ。
「……え？」
それを見た一夏は、一体何のことだと眉を顰める。
「塗るって…何処に？」
「あら、そんなの決まってますわ。わたくしの肌に、ですわよ」
「は、肌ぁ！？」
「そうですわ。日焼け後のケアはしっかりしないと、後で大変なことになってしまいますもの」
当然でしょう？

そんな表情でつかつかと近付いて来たセシリアは、手に持っていた小さなボトルを一夏の手に握らせる。
「これはアロマオイルですわ。日焼け後の肌のケアにとてもいいオイルなんですの」
「え？　だって、ちゃんと日焼け止めのオイル塗っただろ？　なら、日焼けなんてしてない筈じゃ…」
「あら、日焼け止めのオイルで一〇〇パーセント日焼けを防げる訳ではありませんのよ？　ですから、そのケアをしっかりやっておかないと、後で予想もしなかった状態になるという事だってあるんですの」
「そ…、そうなのか…？」
「ええ、そうなんですの。ですから、そうならないようにケアが大事なんですわ。その為にも、一夏さん、これをわたくしの肌に塗って下さる？」
艶やかな眼差しでジッと見上げられ、その視線の強さに一夏は無意識にこくりと頷いてしまう。
頷いてからハッと気が付いても、時既に遅し、だ。
「じゃあ、お願いしますわね」
一夏の反応ににこりと綺麗な笑みを浮かべたセシリアは、くるりと踵を返すと部屋の奥に敷かれた布団の方へと歩いていった。

学園指定のトレーニングウエアを脱いで、布団の上に広げたバスタオルの所にうつ伏せに寝そべるセシリアは、身に着けているのは小さな尻を隠すパンティ一枚だ。
綺麗な背中を露にしているセシリアの姿に、一夏は無意識にゴクリと唾を飲み込む。
しかし、昼間も同じようにオイルを塗らされた事を思い出した一夏は、この時点でどうにでもなれという半ば投げやりな気持ちで手にしていたアロマオイルのボトルの蓋を開けた。
「セシリア、いいか？」
「いいですわ。早く、一夏さん」
違う意味で誘われているようなセシリアのセリフに、一夏の鼓動がドキリと高鳴る。
だが、今はそういう事ではないと自分の心の奥で疼く気持ちをどうにか抑え、手に持ったボトルを傾けて中に入っているオイルをセシリアの背中に垂らした。
とろり…と白い肌にオイルが垂れると、その冷たさにセシリアの躰がビクリと震える。
「あ、ごめん…、いきなりで冷たかったか？」
思わずそう謝れば、すぐにセシリアがふるりと首を横に振る。
「い、いいえ、大丈夫ですわ」
「そうか？　じゃあ、塗るぞ」

セシリアの様子を伺いながら、一夏はそろりと彼女の背中に手を伸ばす。
白い背中に触れればその感触にもセシリアノ躰はピクリと震えるが、触れなければ濡れないだろうと心の中でだけ呟いて、窪みに溜まったオイルを広げるように手を動かした。
少し火照っているように感じられる、白い肌。
これはセシリアが言ったように、目には見えない日焼けがあるのだろうかと考える。
ぼんやりと白い背中にオイルを塗り広げていた一夏だったが、ふと彼女の背中が少し凝っているように感じられて、無意識に其処を揉み解すようにぐいっと力を入れていた。
「セシリア…、背中、少し凝ってるな。マッサージもしてやろうか？」
一夏は元々マッサージを得意としているために、ついついそんな気になってしまったのだ。
別に深い考えナシで言ったことで、ただ凝った背中を解してやりたいという気持ちだけで躰が勝手に動いただけのこと。
セシリアから答えが返る前に、背中にオイルを塗っていただけの手の動きが、筋肉を揉み解すような動きへと変わる。
途端に、セシリアの躰がビクリと震えあまやかな声が零れ出てきた。
「あぁ…ん…」
無意識に口から零れ出てしまったのだろう。
セシリアは恥ずかしそうに躰を捩って、両手で口を塞いでいる。
上半身は裸だという事を忘れているのか、姿勢を変えたことで一夏の視界の中にセシリアの豊満な乳房が飛び込んできた。
チラリと覗くピンク色の乳首が非常に目の毒だ。
そんな光景から慌てて目を逸らしながら、一夏は顔を紅くさせつつ口を開く。
「わ、悪い…、俺、余計なした…よな…」
がりがりと頭を掻きながらそう告げれば、すぐにセシリアから反論の言葉が返ってきた。
「い、いいえ、ごめんなさい。悪いのはわたくしの方ですわ。はしたない声など出してしまって…」
「そ、そんな事ないぞ。気持ちよかった…んだろ？」
「え、ええ…。一夏さんのマッサージが…凄く…気持ちよかったから…」
「なら、そのまま…自然にしてればいいよ。続き、やってもいいか？」
オイルを塗ることよりもマッサージの方が気になってしまう一夏は、ついついそんな事をセシリアに聞いてしまう。
そうすれば、「お願いしますわ」と言葉が返ってきたので、今度は遠慮なくマッサージする為に白い肌に手を伸ばした。

背中を丁寧に揉み解した後、しなやかな脚も左右それぞれ揉み解していく。
勿論、当初の目的であるオイルを塗ることも忘れてはいない。
オイルを使うことによって手の滑りが良くなる為、マッサージするのも少し楽なのだ。
そうして背中と脚を揉み解した一夏は、ふと視界に入ったセシリアの小ぶりの尻に目を留めた。
マッサージする際には、大抵全身揉み解すのだ。
尻だって例外ではない。
なので、手の平にとろりとオイルを垂らした一夏は、それを両手で伸ばして徐にセシリアの尻を掴んだ。
むに…と指が食い込む、柔らかな尻。
「ひぁ…っ…」
流石に其処を揉まれると思っていなかったのか、途端にセシリアの躰がビクリと跳ねて、甘い声が零れ出た。
「べ、別に、俺は変なことはしないぞ。マッサージしてるだけ、だからな」
まるで自分自身に言い聞かせるかのようにそうセシリアに言いながら、一夏は彼女の尻を揉んでいく。
むにむにと弾力のある二つの丸みを揉めば、その度に其処に力が入るようにびくびくとセシリアの躰が震えた。
「あっ、んん…、ふ、ぁあ…ん……」

セシリアの口から零れ出てくる悩ましげな声は、彼女が意識して出している声ではないはずだ。
しかし、聞いている方はそんな声にどうしても変な気分になってきてしまう。
マッサージしてるだけ。
そう思っていても、ふりふりとまるで誘うように揺れる小ぶりの尻に、どうしても変な気持ちが沸き起こってきてしまうのだ。

もう、ダメだ。

そう思った一夏は、セシリアの尻からパッと手を離すと布団から飛び退いた。
「わ、悪い、セシリア、もういいだろ？　背中とか、自分では手の届かない場所はオイル塗ったし…」
「…一夏さん…？」
一夏の言葉に振り返ったセシリアは、ぽやんとした表情で一夏を見上げる。
そのセシリアの表情に、一夏の鼓動がドクリと跳ねた。
目を潤ませた上に目許を紅く染めた彼女の表情が、常に見るものとはまるで違っていたからだ。
しかも、彼女は裸同然の格好をしている。

そんなセシリアの姿をまともには見られなくて、一夏はぶるぶると頭を振る。
そして。
「ご、ごめん、俺、もう部屋に戻るから…っ！」
それだけ言うと、一夏は彼女の部屋から飛び出した。

＊＊＊＊＊

慌てて自分の部屋に駆け戻った一夏は、部屋の中央に敷かれていた自分の布団に倒れ込む。
「勘弁してくれ…」
決して邪な気持ちがあった訳ではない。
純粋に、筋肉を解してあげたかっただけだ。
自分の躰も結構疲労を感じているから、女子ならば尚更だろうと思ったまでのこと。
だけど、どうしてこんな事になったのかと一夏は頭を抱える。
正直なところ、下半身に熱が生じているのは男として正常な反応だろうとは思う。
そう思うが、今此処で…というのはどう考えても拙すぎる。
「ホントに…勘弁してくれ……」
一夏の躰の変化などには気づいてないだろうセシリアは、この合宿中にまた同じような事を求めてくるかもしれない。
その時、自分は平常心でいられるか。
一夏にはその自信はまるでなかった。
「俺…無事にこの合宿…乗り切れるだろうか？」
昼間の課外授業だけならば、乗り切れる自信はある。
けれど、こんな事が毎日続いたらどうなってしまうのか、正直自分に自信がない一夏だ。
それでも、いつもと同じように時間は流れ、明日という日はやってくる。
一夏は不安な気持ちを胸に、今日という一日を終えようとしていた。
両手に残るセシリアの尻の感触を思い出しながら。

《了》

2011年6月5日、横浜BLITZにて開催された一夜限りのスペシャルイベント『IS ワンオフ・フェスティバル』。よもや抽選に通るとは思いませんでした∑(゜ω゜ノ)ノ その日だけは、今回のIS本の原稿作業をお休みして横浜へ行きました。聞いたところによるとライブ抽選の当選確立は1/20だとか。運がよくてホント良かったです(*゜ー゜)今回のイベント内容は声優さんのトークショー&ライブ、栗林みな実さんのライブという豪華なものでした。考えれば声優さんのトークショウとかへの直参加は自分初めてじゃね？w その点で言えば、見かけた、聴いた事がある程度の認識の私にはとても新鮮なもので楽しかったです。

ライブ内容については既に告知のとおり、BR&DVDになるので行くことの出来なかった方は楽しみにしていいと思います！私的には「やさぐれシャル(花澤さん)」「終始セシリアでしたわ(ゆかなさん)」「やっぱりシスコン(うっちー)」が印象的でした。イベント後、ラジオISを聞き返し、「アレはこうだったんだなぁ～」など思い返して楽しんでいるところです。こういったイベントがありましたらまた行って見たいとおもいます～。

ゲスト:ミコトさま

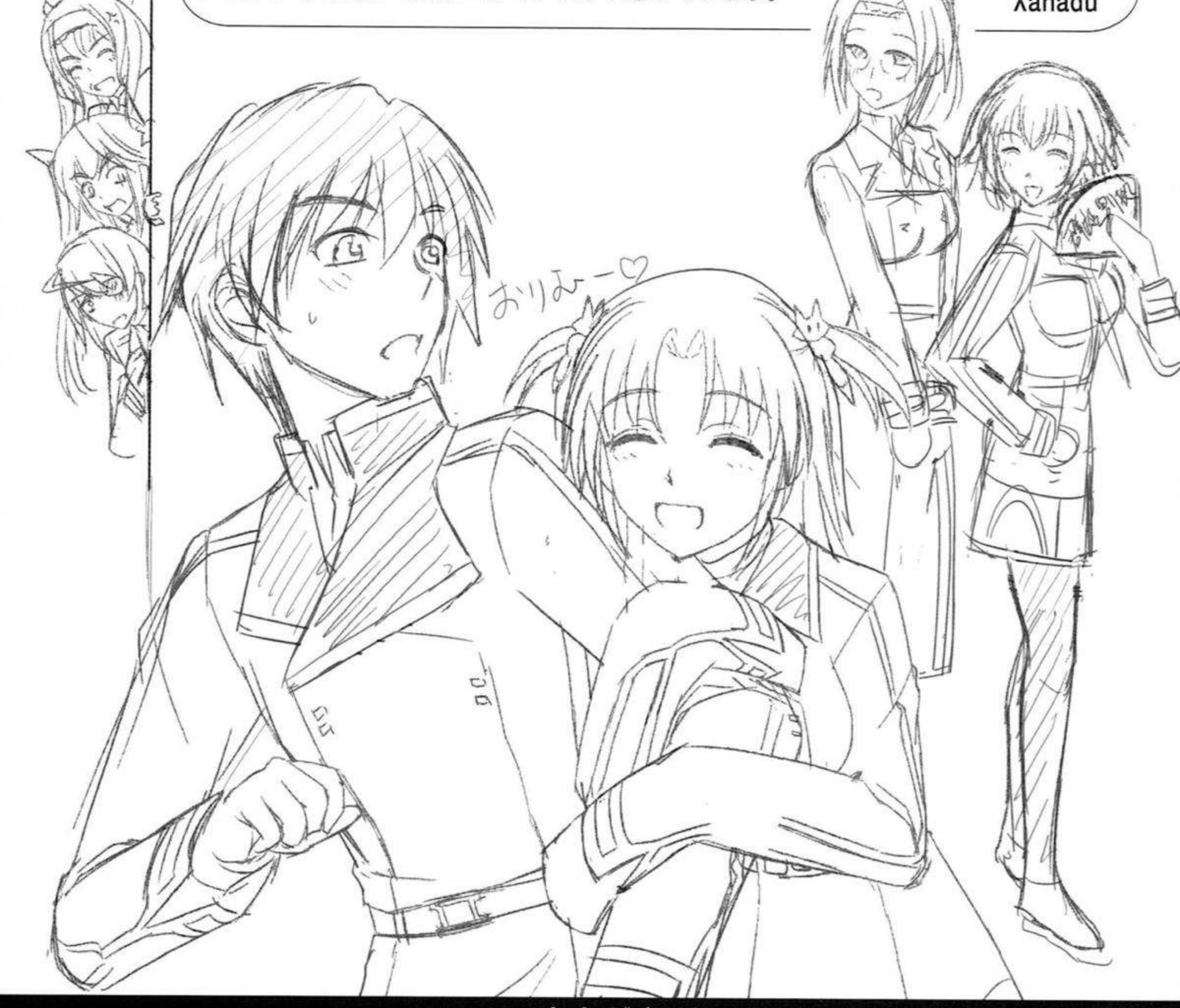
セシリア本発行おめでとう～！ひょんなコトからゲスト扱いになっちゃってますが、畑違いの人間なのでざなくんの本をいつも読んでる皆様のお目汚しにしかなっていないような気もしないではないです…。申し訳ない(><)ホントはもっとえっちぃ小話の予定だったのに…ね…(苦笑)ざなくんの本の読者の皆様、普段は畑違いの女性向けサークルやってるので遭遇することは略ないと思いますが、また何処かでお会いしましたらその際はよろしくお願いします～。
最後に。今回はホントに楽しかったよ！ざなくん、ありがとうね～！！

ミコト【サークル】D－W　【連絡先】d-w@yan.jp

おれは元気だぞー！はい。Xanaduと申します。よもや流行ジャンルで2冊も出すとは思いもよりませんでしたが、これもISという人気作品に魅了されたからでしょう。
今回はゲストとしてミコトさまに寄稿していただきました。ありがとうございます！

さて、刊行中の原作では、TVアニメに出ていない生徒会メンバーや謎の組織など魅力的なキャラクターが居まして実に描き足りないです。が、既にOVAの発売が発表され、内容も作品継続話という事で2期、3期を匂わす感じで、色々期待しているところです！今後もファン活動として、期待して待つのではなく、率先して盛り上げていこうと思っています。

Xanadu



IS "Infinite Stratos"
Cecilia Alcott fan book "BLUE Jewel"
◆発行日:2011.6.19◆発行:なたくが行く！◆発行者:Xanadu
◆連絡先:xanadu_kenji@yahoo.co.jp
◆HP-URL:http://xanadu2.blog8.fc2.com/　◆Twitter:Xan_adu
◆印刷所:サンライズパブリケーション　◆成人指定
◆本誌画像の転載、データ化、Web等での共有は遠慮ください。
◆東日本大震災に対しまして、本誌売上げの一部を義援金として
募金いたします。ご購読、本当にありがとうございます。

BLUE TEARS